

平成27年度 校内研修計画

大藤小学校

1. 学校課題

大藤地区は、緑が豊かで、桃やすももなどの果樹栽培を中心としている地域である。学校と地域との結びつきが強く、保護者や地域は学校教育に深い理解と関心をもち、様々な活動に協力的である。以前、本校が取り組んだ「開かれた学校づくり」の研究によって、より一層地域との結びつきが深まり、今もなお継続されている。児童は温かく優しい地域の人々に見守られ、明るくのびのびと生活している。

本校児童は65名。全学年が単学級であり、どの学年も15名未満の小規模校である。大規模校と比べると個人指導がいき届きやすいが、やはり社会の変化に伴い、児童一人ひとりの個性は多様化し、学習意欲や学習能力の個人差も大きい。

各学級における児童の実態についても、「個人差が大きい」「自分の考えを、言葉や文章で伝えることが苦手である」「友だちの考えを参考にしたり自分の考えに取り入れたりすることがあまりない」「家庭学習をする児童としない児童の差が大きい」などの課題が挙げられている。年々児童数は減少し、今後の入学児童が10名を超えることは予想しにくく、少人数を意識した授業の構築が課題に加わっている。

2. 研究主題

「自ら考え、課題を解決できる児童の育成」
～つながり、学びあう少人数での学習集団づくりを通して～

3. 主題設定の理由

(1) 学校教育目標具現化の立場から

本校の学校教育目標は『自ら考え、正しく判断し、行動する児童の育成』である。

具体目標として「自ら考えて学習する子ども」「健康で明るい子ども」「思いやりの心をもつ子ども」「協力しやりぬく子ども」「郷土を愛する子ども」の5つが掲げられている。

今年度の大藤小学校グランドデザインでは、その具体策として確かな学力の育成、豊かな心の育成、健康でたくましい心と体の育成、地域に開かれた学校づくりがあげられている。その中で、確かな学力の育成においては、基礎的・基本的な学力の定着とともに自分なりに知識を活用し、自ら考えて判断したり、表現したりできる児童の育成が大切であると考えられる。そうした力をつけるためには、子どもたちの実態に合わせた指導を行っていくことが必要となる。子どもたち一人一人を把握し、少人数を踏まえたより良い授業を実践して、Q-Uを活用した学級集団づくりによる豊かな心の育成とそれを活用した授業づくりにより、「自ら考え、正しく判断し、行動する児童が育まれるのではないか。」と考えこの主題を設定した。

(2) 今日の課題から

現行の学習指導要領においては、「生きる力」を育むことが基本理念とされ、「生きる力」の一つには「確かな学力」が挙げられている。「確かな学力」とは、3つの要素からできている。第1に基礎的・基本的な知識・技能。第2に知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力。第3に学習に取り組む意欲である。この3つの要素が有機的に結びつくことで、子ども達に「確かな学力」が育まれる。

まずは、共に学び合う学習集団の力を高め、学ぶ意欲をもたせることが大切であると考える。そして、指導要領で示されている学習内容を確実に習得させる個に応じた指導も不可欠となる。その上で、蓄えられた知識を積極的に活用し、自分なりに考えて課題を解決したり、自分の考えを表現したりする力をつけることが重要となってくる。

日々の授業の中で、「教師と子ども」「子ども同士」の互いのつながりを大切にした。昨年度までの「思考力・判断力・表現力」の指導の上に立ち、自分の思いや考えを友だちの言葉と関わらせながら話すことができる力が、互いにつながり、学び合う学習集団としての力を高めていくと考える。子どもと子どもをつなげ、学び合う関係を作っていくためには、教師の適切な働きかけが欠かせない。友だちの言葉に耳を傾け、聴き合う関係づくりを行っていくために、これまで以上に、子どもたちが協同的に学び合う授業への転換を意識していきたい。

(3) 昨年度の研究から

本校は、平成22年度から「自ら考え、課題を解決できる児童の育成～思考力・判断力・表現力を高める指導を通して～」をテーマに研究を進めてきた。

そして昨年度は、国語・算数・理科・社会の主要教科に限定して、思考力・判断力・表現力を高める授業実践を行った。Q-Uを活用し、望ましい学級集団づくりにも取り組んできた。今年度も、Q-Uなど各種検査を活用した児童の分析をし、それを授業に生かすことに加え、直近の課題である少人数でも自ら学びあう集団づくりについて研究し、

工夫した日々の学習を行うことにより、それを自ら考え、正しく判断し、行動する児童を育むことにつなげたいと考えた。

4. 研究仮説

自分の思いや考えを友達の言葉と関わらせながら話すことができる力をつけ、少人数におけるつながり合う学習集団・自ら学び合う、集団づくりを行うことにより、自ら考え課題を解決できる児童が育つであろう。

「つながりあい・学びあう学習集団」とは、学習を通じて一人一人が認められ、存在感・価値観を感じることができる集団であり、お互いの意見・頑張り・個性を認め合い、刺激し合って高め合える集団であると考えられる。「少人数」とは、母集団を分けた少人数と母集団の人数が少ない2つが考えられる。本校では、一年生2名を少人数と定義し、それ以外の学年は、集団に分けることができるので小集団と定義する。今後のことを考へて少人数での指導も研究に加えていく。このような集団に育てていくためには、授業中で少人数や小集団でも子どもたちが積極的にコミュニケーションをとることができ、そのような学習場面を設定することが必要となり、ただ自分の考えを発表するだけでなく、認め合い・高め合えるような授業を仕組んでいく必要があると考える。こういった授業を続けていくことで、自分で考え問題を解決できる児童が育つであろう。

5. 研究内容と方法

(1) 研究内容

- ・少人数や小集団での効果的学習方法を取り入れた授業実践および授業公開の実施
- ・昨年度までの実践を踏まえた上でのCPDAサイクルを活用した授業改善の取り組み
- ・一人一実践の取り組みは継続して行う
- ・児童の実態把握（NRT検査・Q-U）とK-13簡易法を用いたQ-Uでの学級づくり
- ・学びを促す家庭学習での環境づくり

(2) 研究方法

- ・全職員の共通理解を図るために、全体研究会を中心に研究を行う
- ・外部講師を招いて、少人数における児童の効果的な授業法などの理論研究を行う
- ・各自、授業公開を行うと共に、授業改善についての研究を行う
- ・NRT検査やQ-Uテストを使い児童の実態を把握し、それを様々な場面で生かす

(3) 検証方法

- ・2回のアンケートとQ-Uでの数値面での評価
- ・授業実践での児童の様子、児童のノート等の記述

校内研修計画

回数	日時		主な内容	担当	TC 要請
1	4 / 3 (水)	全	昨年度の研究についてと今年度の方向性	川野	
2	4 / 8 (水)	全	学校課題、研究主題、研究内容・方法 年間計画について	川野	
3	4 / 15 (水)	全	学校課題、研究主題、研究内容・方法 年間計画の決定（授業者の決定）	川野	
4	4 / 22 (水)	全	家庭学習の情報交換と方向性 学習アンケートについて NRT検査の分析方法について	廣瀬 川野	
5	5 / 18 (月)	全	少人数での指導についての理論研究	川野	
6	5 / 22 (金)	全	K-13法によるQ-Uの分析と活用とNRT検査の分析（全校と3年生）	川野	
7	6 / 5 (金)	全	K-13法によるQ-Uの分析と活用とNRT検査の分析（1, 2年生）	川野	
8	6 / 10 (水)	全	K-13法によるQ-Uの分析と活用とNRT検査の分析（4, 5, 6年生）	川野	
9	7 / 1 (水)	全	学び合う学級づくりについての学習会	川野	○
10	8 / 19 (水)	全	大藤小学校の理論の構築と教育課程還流報告会 第1回アンケートの考察	川野	
11	9 / 2 (水)	全個	授業案について、授業案作成	川野	
12	9 / 9 (水)	個	授業案作成（各授業者）	授業者12	
13	10 / 7 (水)	個	授業案検討	授業者1	
14	10 / 14 (水)	全	☆研究授業1	授業者1	○
15	10 / 21 (水)	全	授業案検討	授業者2	
16	11 / 4 (水)		☆研究授業2	授業者2	○
17	11 / 13 (金)	全	K-13法によるQ-Uの分析と活用（1, 2年生）		
18	11 / 27 (金)	全	K-13法によるQ-Uの分析と活用（3, 4年生）		

19	12/2)	(水)	全	K-13法によるQ-Uの分析と活用(5, 6年生)		
20	12/9)	(水)	全	アンケート、修正授業案について	川野	
21	1/15)	(水)	全	研究の成果と課題、研究紀要について	川野	
22	1/27)	(水)	全	研究のまとめ	川野	
23	2/24)	(水)	全	アンケートの考察、研究紀要印刷	川野	
24	3/9)	(水)		研究紀要綴じ込み	川野	

研究主任 川野 和昭